

ネパールのカースト間関係をめぐる人類学的研究 — 一日常 / 非日常における食の場から —

山上 亜紀

成蹊大学アジア太平洋研究センター 特別研究員
(現 成蹊大学アジア太平洋研究センター 客員研究員)

緒 言

南アジア全体に広がるカースト制度は、一般的に「差別」や「格差」といった概念と共に語られがちである。たしかに、報告者が研究の対象としてきた、ネパールの首都カトマンズを中心に居住するネワールの人々は、異なるカーストの人との食物授受や共食(食事の場の共有)、あるいは接触規制を日常的に遵守している。特に水と、彼らの主食である米飯(水で炊いた米)は、下位の者が上位の者に渡せないものとされている。さらに水よりも米飯の方が、より厳格にその授受を制限されている。

しかし、ある特定の祭礼では、厳格な授受規制の下にある米飯を介してカースト間の格差が曖昧、もしくは消滅する場が存在する。すなわち、日常的な場と非日常的な場で用いられる米飯を通して、ネワール社会の基底をなすカースト制度の平等性と不平等性の両側面が垣間みられるのである。報告者は、食のなかでも特に、米飯と関連する日常的な場と非日常的な場を詳細に分析することで、ネワールの人々が保持するカースト制度の構造的な把握が可能となり、ひいては南アジア全般に広がるカースト格差の根本的な理解につながるのではないかと考え、調査を進めた。

考 察

1. 日常的な場

カースト間の規制が生じる日常的な「食」の場として、ここでは特に、家庭や地域社会とレストランなどの外食の場に着目し、それぞれにおける食物授受や共食の現状を考察する。

1-1. 家庭と地域社会

家庭内の成員であればカーストが異なる事はないため、女性の生理期間中や産褥期などの特別な機会をのぞけば、基本的に食物授受や共食に関する禁忌はないと言

える。ただし、厳格な上位カーストの人の中には、家族成員であっても他の人と共に食事をしない人がまれにいる。

異なるカーストの人と接触する可能性のある、地域社会全般での食物授受に関しては、授受される食物の種類や状態により規制の程度や授受の可否が異なる。生の食材であればカースト間の授受規制は存在しないが、調理されている場合にはその調理方法に準拠する。油やギー(精製バター)で炒めたものより、水で煮炊きしたもののの方が一層厳格に授受規制を課される。なかでも、炊いた米飯に対する規制は最も厳格である。インドにおいても、主に米飯を主食とする地域を対象とした先行研究において、米飯が不浄となりやすい点を指摘するものがあることから、このことが、インドを含めた南アジア全般において、ある程度普遍的な事実であることが分かる¹⁾。特に米飯を主食とした定食については、今も基本的に、カーストの異なる人々と空間を共にして食する事はなく、炊いた米飯を授受する事についても、そもそも食の空間を共にする事がないのだから可能性としてありえない、との意見が一般的である。

1-2. 外食

近年、急速に外食が普及したこともあり、外食における共食に関しては、ある程度の規制の緩和が見られる。例えば、共にレストランへ行った友人が異なるカーストの人であっても、油やギーを使った食事であれば、一つの皿から皆で取り分けることに抵抗感は見えない。また、同じ空間に誰がいるかなど、気にするような素振りもない。しかし、米飯を主食とする定食に関しては外食を避ける人もいまだに多く、今もなお古くからの慣習が根強く残っていると語る。ただしこの拒否感、異なるカーストの人との共食を避けるためと言うよりも、調理をする人がどのカーストに属する人物なのか判別しにくいことに由来する。調理人に内在する不浄性が、調理した食

事に伝わると考えられているため、下位カーストの人が調理している可能性がある外食には手を出さない、厳格な上位カーストの人も少なくないのである。レストランなどでの外食の場合は、調理人がどのカーストに属しているか、すなわち、調理の際に食事へ不浄性が伝染する可能性があるか否かが、重要な問題となってくるようだ。

2. 非日常的な場

非日常的な場のなかで、報告者が特に注目したのは、儀礼や祝事などに伴う宴会と、首都カトマンズの南に位置するパタンと呼ばれる地域において行われる、イェンヤー・プニ (*yāyāh punhi*) と呼ばれる祭礼である。宴会に関しては、異カーストの人との共食や宴会で供される食物の現状を、祭礼に関しては、祭礼で用いられる米の供物の分配のあり方を、カースト問題と照らし合わせながら見ていきたい。

2-1. 宴会

レストラン以外の外食の可能性として、儀礼や祝事などに伴う宴会やパーティなどが挙げられる。これらは、伝統的には同カーストの人のみが集う場であったが、例えば現代の結婚式に伴う宴会などでは変化が見られる。下位カーストへの教育の普及や、女性の学歴向上、あるいは社会進出などにより出会いの場が増え、異カースト間の恋愛結婚が増加傾向にあるからである。花嫁や花婿の属するカーストが異なれば、結婚式の宴会に招待される人々のカースト的地位も異なる。必然的に、異カースト間の結婚式の宴会では、異なるカーストの人と食事の場を共有する事になるが、このような祝いの場であえて同席を拒否する人は、今はそう多くない。さらに、もともと宴会の場には米飯が主食として出てくる事はないため、食物を介して伝達される不浄性を、米飯が供される場ほどは気にしなくてよい。古くからの宴会の形態で出てくる主食は乾燥米であり、近年多くなったビュッフェ形式のパーティでも、基本的に水で炊いただけの白い米飯が出てくる事はなく、精製バターを入れて炊いた米やナンが出される。宴会の形態が変化しても、日常の場面と同様、米飯に関する規制への配慮は残っているようだ。

スト間の結婚式の宴会では、異なるカーストの人と食事の場を共有する事になるが、このような祝いの場であえて同席を拒否する人は、今はそう多くない。さらに、もともと宴会の場には米飯が主食として出てくる事はないため、食物を介して伝達される不浄性を、米飯が供される場ほどは気にしなくてよい。古くからの宴会の形態で出てくる主食は乾燥米であり、近年多くなったビュッフェ形式のパーティでも、基本的に水で炊いただけの白い米飯が出てくる事はなく、精製バターを入れて炊いた米やナンが出される。宴会の形態が変化しても、日常の場面と同様、米飯に関する規制への配慮は残っているようだ。

2-2. 祭礼

イェンヤー・プニでは、パタン地域を4つの区域に分類し、一日ずつ順に祭を祝う。そのなかで着目したのが、サマエ・バジ (*samay baji*) と呼ばれる乾燥米を用いた供物 (図1) と、ブザ (*bhūjā*) と呼ばれる炊いた米飯で作る供物 (図2) である。

これらの供物は、それぞれの土台が乾燥米あるいは米飯で作られており、その周囲に肉や野菜などが装飾されている。米飯の供物の方が規模は小さいが、乾燥米の供物の山が1つであるのに対して、米飯の供物は12体作られる。双方とも、一度供物として神々に供された後は、カーストの相違に関係なく、参拝者に平等に分配される習わしである。しかし実際には、乾燥米の供物の方が分配の範囲に限定があるように見える。

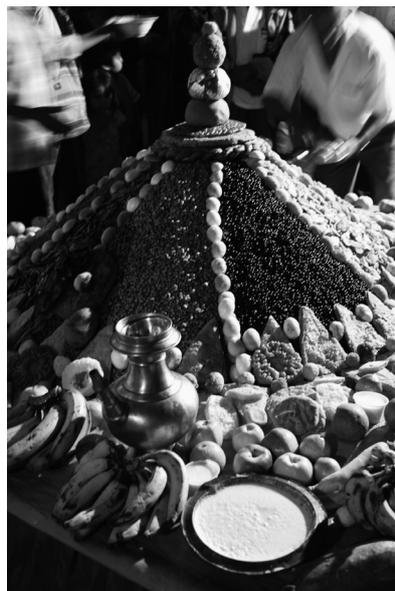


図1 乾燥米の供物

乾燥米の供物を意味するサマエ・バジは、イェンヤー・プニの機会に複数の場所で見られ、また他の祭礼でも供される機会があるが、まずはイェンヤー・プニに限って見てみたい。乾燥米の供物は、基本的には地域住民の持ち寄りによって作られる。事前の打ち合わせで、誰が何を持ち寄るか決められ、その決定に基づいて祭礼の当日に乾燥米の供物が作成される。この乾燥米の供物の分配に関しては、元来はカーストの差異を越えて平等になされるべきものとの見解もあり²⁾、実際に、最終的には、その場に参集した個々人に分配される。しかし近年では、物価の上昇や、地域のつながりがより希薄になりつつある現状が反映し、供物を持ち寄る人々と、個々人の持ち寄る量が減少しつつある。そのため、乾燥米の供物の規模が縮小し、結果的に分配できる量と人数が限られている事例が少なくない。実際、供物が分配される範囲は、祭礼関係者や、地域の主要な住民のみに限定される事例が多くなっている。ただし、この限定範囲は、カーストを基盤とするというよりも、地域のつながりを反映しているという方が、より現実に近いだろう。

対して米飯の供物が図2のような形で供されるのは、私が知る限りイェンヤー・プニ以外では見られず、他の祭礼で米飯が用いられている例があったとしても、深いお椀のような形の容器に盛られた米飯や、米飯で神像を作る事例などになり、意味合いが異なると考えられる。したがって、ここで取り上げる米飯の供物の事例はイェンヤー・プニに限定するが、少なくともイェンヤー・プニの祭礼においては、米飯の供物の規模に変化はさほど

見られず、また分配される範囲にも制限がない。そもそも、米飯の供物は、特定の家庭で義務的に作られるものであり、また土台となる米の分量と装飾される食物の種類は特定されているため、供物の装飾の量や質に多少の変化が生じて、供物自体の量と個数に大きな変化は見られない。したがって、米飯の供物に関しては、分配する元々の量が大幅に減少することは、基本的にはないと考えられる。

以上から、供物自体の規模の変化に差異のあることが、最終的に供物を分配する範囲の相違につながる一つの要因と推測される。そしてさらに、分配範囲の相違の背後には、その供物が実際に食べられるのか否か、という問題が隠されているように思われる。

乾燥米の供物も、米飯の供物も、一晩供えられた後に人々に分配される。ただし前者は、供えられた翌朝に分配され、後者は翌日の夕方まで屋外に放置される。前者には、調理した肉や野菜も含まれるが、基本となるのは乾燥米であり、腐敗しにくい。対して後者は、米飯を主としており、前者と比較して明らかに腐敗しやすく、実際に一晩経過した米飯の供物は、異臭を放っている。

イェンヤー・プニ以外の祭礼の場で供えられていた乾燥米の供物は、神々に供えられたあと即座に回収し、関係者に分配されていた。乾燥米の供物は、一晩置いたとしても、またはすぐに回収したとしても、米飯に比べて腐敗しにくい事に変わりはなく、現に分配された乾燥米の供物は、人々に食されている。対して米飯の供物は、言い伝えとしては、これを食べると呪術師や悪霊によっ



図2 米飯の供物

て冒された病気が治るとか、子供の夜泣きが治ると言われているが、分配されてもほぼ人の口に入る事はない。その大半が子供たちの手に渡り、彼らは米飯の供物を丸めて、投げ合って遊んでいる。衛生上、口にして問題ないと考えられるか否かが、分配される対象の優先順位や制限の有無に関わっているように思われる。

結論と今後の課題

日常の場面においても、非日常の場面においても、食に関する規制は近代化の中で希薄化し、カースト間の格差も緩和しているように思われるが、米飯に対する規制のみはある程度昔ながらの形で残っている。これは、米飯が不浄性を最も伝達しやすいことに基づいた結果であろう。しかしここで注目したいのは、神と対峙する祭礼の場である。本研究で取り上げた祭礼では、祭礼の中で供物の作成が義務的に行われていることや、衛生上食べられないと見なされることが、カーストを越えた平等な分配という、米飯の供物にまつわるしきたりを持続させている要因のひとつのように見受けられた。伝統的な慣習や近代的な観念が絡み合う中で、日常生活においてはカースト間の格差の指標となる米飯が、神と対峙する場面においては、カーストを越えて平等に分け与えられ、

今もその慣習が残存している。その事実在即せば、彼らの意識の中には昔も今も、カーストの差異にとらわれない平等性に根ざした観念が存在しうると考えられるのではなかろうか。

本研究のみで、結論を出すに足る情報が収集できたとは言いがたい。今後は、米飯にまつわる規制が継続的に遵守されている背景をより多角的に探ることによって、それぞれの状況に応じたカースト間関係のさらなる理解へとつなげていきたい。

謝 辞

本研究は、公益財団法人三島海雲記念財団の学術研究奨励金により遂行する事ができました。ここに厚く御礼申し上げます。

文 献

- 1) Babb, Lawrence A. "The Food of the Gods in Chhattisgarh: Some Structural Features of Hindu Ritual", *Southwestern Journal of Anthropology*, Vol.26, No.3, 287-304, 1970.
- 2) Allen, M. "Hierarchy and Complementarity in Newar Eating Arrangements", *Anthropology of Tibet and the Himalaya*, Vajra Publications, 11-18, 1993.